



# ヤノケンの お役者修行

## 俳優人生こぼれ話パート

今回は役者泣かせの共演者？達について書いて見よう。昔から「泣く子と地頭には勝てぬ」という諺があるが、業界にも「子供と動物には勝てない」という言い回しがある。どんな名優の名演技でも子供や動物には食われてしまうというような意味で使われる。私の経験の中にもそういうことがあった。最も私自信が子役出身だったのだからその対象でもあった訳だが。私の場合はもっぱら動物が共演者だった。前回触れた日テレの『太陽野郎』というテレビドラマでは「馬」と「牛」だったし、NHKの芸術祭参加作品ドラマ『とんころの歌』では「豚」と共演した。当時売れっ子のシナリオライター「岡本克己」の書き下ろし作品で名

作だった。ストーリーは、3人の若者がお金を出し合って養豚を始め一攫千金を夢見る、だが、育てて行くうちに愛着が湧き、豚を売るのがいやになる。断腸の思いで売りさばき、金を手にして3人は離れ離れになる。やがて3人は元の豚小屋に舞い戻り、養豚を再開するという話。つまり主役は豚なのだ。確か暑い盛りに茨城県の豚小屋を借りて撮影した。ホンの子豚から、成長して売れる位の成豚まで数十頭の豚を撮影に使った。毎日豚との格闘で体中に臭いがしみ込むほどだ。豚は思っていたよりずっときれい好きで、小屋はいつも清潔さを保たなければならぬ。扱いの馴れないのは養豚が初めての役なので問題は無かったが、扱

いは本当に苦労した。本物の飼育豚なので傷をつけたりストレスを与えたりすると食欲をなくし売り物にならなくなってしまい、飼い主に迷惑をかけることになるから何よりも豚を最優先に考えての撮影だ。撮影が進むにつれて本当に可愛くなってきた。豚が丸々太っていよいよ競りに出すシーンで豚が泣いた。アップになった豚の目に大粒の涙が光っていたのだ、私も共演している俳優達もつられて感情が昂り、感動的な別れのシーンが撮れた。残念ながら豚語？を解せないのですがその真意を豚に問うことはできなかったが強烈な印象で心に残っている。余談だがこの撮影をしている頃、確か20代の始めだと思うが、『俺達に明日はない』というアメリカの映画が入ってきた。その映画に出演していた「マイケル・J・ボ

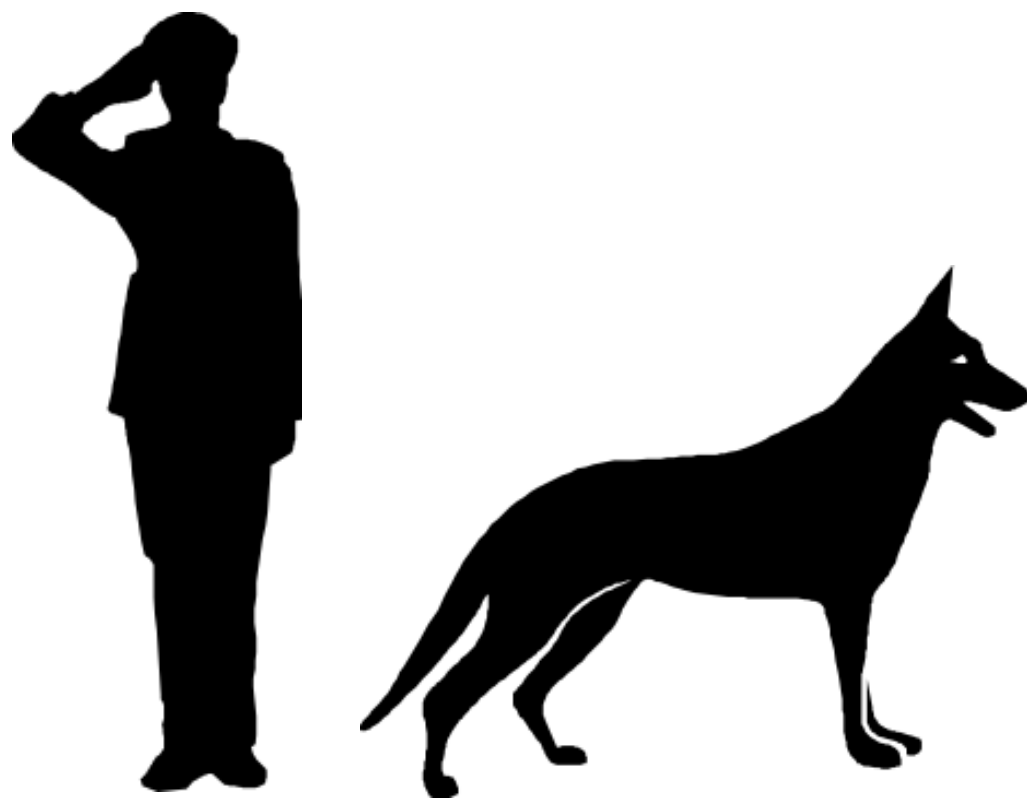
ラード」という俳優の演技に影響を受けていたので私としてはかなりアクの強い演技をした作品だ。

動物との共演でやはり忘れられないのが「犬」との作品だ。同じような役柄で違う作品に出演した。『刑事犬カール』という「木の内みどり」主演の作品と『刑事くん』という「桜木健一」主演の作品だ。2本とも警察犬の養成をする警官の役。『刑事犬カール』ではカールの訓練士で、事件に巻き込まれて殺されてしまう。犯人を追い詰めるカールが事件を解決し、私の仇を取るという話。当然カールが主演なのでスケジュールは犬任せ。機嫌がいい時に撮影しないと演技(犬技?)をしてくれない。現場に行って待たされることが多かった(犬の機嫌待ち)。カール役はメインが1頭とスタン

ト用が2頭用意されていてアップはメインが受け持つ。まるでスター扱いで犬が中心の撮影状況に振り回された。回想シーンで私がカールの訓練をするところが随所に出てくるが撮影の度に苦労した。アニマルプロダクションの犬係が勘違いをしているようだ、犬は言葉を発しないからその係が代弁するのだがスター気取りなのはこの係だ。犬を動かすのだからある程度はやむを得ないのだが、ひどい勘違いだと私は感じた。カールにはなんの恨みもないがこの係は許せなかった。でき上がった作品を見るとカールの名演技?には感心してしまう。私の仇をとって「木の内みどり」とカールが私の墓前に報告するシーンでは「仇は討ちました、安らかにお眠り下さい」とカールの台詞が聞こえてくるような晴れやかな顔をして写っていた。流石スター犬だけのことはある。

もう一本の東映で撮影した『刑事くん』では、主演の刑事くん「桜木健一」と私の扱う警察犬が共に事件を追っていく

話。奇しくも犯人の凶弾にやられる私の仇を、私が訓練した犬がとるのは『刑事犬カール』と同じだ。この撮影も犬が重要な役割なので撮影は大変だった。主演の「桜木」もそこそこ売れていてスター扱いをされていたが、この回に限っては犬に振り回されていた。やはり何頭かのシェパードを使っただけの撮影だったと記憶している。この作品ではアニマルプロの犬ではなく養成中の警察犬を使った。従って付添いの係も本物の警察犬訓練士だったので、担当官自信の勘違いは無かったが、撮影に不慣れなので現場のコミュニケーションに時間がかかった。犬の演技?を監督が説明するのだが、担当官が芝居を理解できないので犬の動作に置き換えるのが容易ではない。例えば犯人の追跡シーンで臭いに気づき、私と「桜木」に行く手を教えるために鳴きながら呼びにくるところがあったのだが、担当官が「本物の警察犬は呼びにきたりはしない」といって、フィクションの芝居場だからと説明してもなかなか理解し



てくれない。勿論犬に言葉で説明しても無理なのはわかっているので、鳴きながら私たちの所へ来るように犬を呼ぶのだ。フィルムをつなげれば私たちを呼びにきたように見えるから面白い(編集の技術)。私が撃たれるシーンでは、倒れている私の所に犬がきて鳴きながらすがりつくというのがあった。仰向けに倒れている私の所構わず泥足でひっかく、よだれは顔に飛ぶと悲惨な状況だった。私は死んでいるので当然動けない、ただひたすら耐えているばかりだった。でき上がりを見ると犬が本当に悲しんですがりついているように見えた。「桜木」が呼んでもなかなかその場を離れない。この訣別のシーンは圧巻だった。犬の悲しそうな顔と鼻を鳴らすような鳴き声は素晴らしく感動的に撮れていた。この名演技?には私も主演の「桜木」も食われっぱなし、全く動物には勝てない。勿論編集スタッフの苦勞による賜物と言ってしまうとそれまでなのだが。

我々俳優が比較的共演する頻度が高い動物、というより映画やテレビで多く使われる動物は「馬」ではないだろうか。特に時代劇には欠かせない共演者であろう。昔は俳優の必須条件として(馬に乗れること)というのがあったそうだ。私が俳優になった頃はすでにその条件は化石となっていたが乗れないより乗れた方が良い。私と馬の最初の関わりは『太陽野郎』に牧童(カウボーイ)役で出演した時だ。牧場での撮影が主だったこの作品では馬に乗る機会が多かった。乗馬の経験がない私と相棒役の「頭師孝雄」は撮影に入る前に乗馬の訓練に通わされた。世田谷にあった乗馬クラブで生まれて初めて馬に跨ったが最初に抱いた感想はデカイ!だった。当初はただ輪乗りといって調教師の持つロープの範囲を馬に跨ってグルグル回るだけ、それからギャロップ(早足)の訓練へと移る。撮影のための訓練なので時間がない、ましてカウボーイの役なので巧みに乗れなければならない。乗馬訓練では大体40分から50分

を一鞍という。3鞍目ぐらいには駆け足の訓練。馬場の一周は約600m、ギャロップの時に反動の抜き方を教わるのだがこれが難しい。必死に膝を締めるので足腰の痛いこと、トイレにしゃがむ度に呻き声が出てしまう。それでも1日に2鞍の練習に通った。この練習中に最後まで付きあってくれて且つ教えてくれたのは主演の「夏木陽介」親分であった。親分は颯爽と乗っていたし、見事に馬を操っていた。初めて馬が駆け出した時、「俺は馬に乗ってる」と実感できて感動した。その後何回も落馬を経験したが幸い怪我が無かったのは身が軽かったし若さのせいだろう。北海道での撮影で驚いたのは、練習馬場での馬の駆け足と現場で使う馬の速さの違いだ。馬場では結構走れていると思っていたがとんでもない、全くスピードが違うのだ。景色など見えたものではない、馬の両耳の間から見える地面が上下にゆれているだけ、必死にしがみついていた。しかし(習うより慣れる)と

はよく言ったものだ、何日かするといっばしのカウボーイ並に乗れるようになった。もともと乗馬に向いていたのか、体がちいさいから馬が嫌がらなかったのか、北海道へ行って2週間目には裸馬(鞍なし)に乗って牛を追っていた。この作品のおかげで馬に乗れるようになったからその後の時代劇でもなんの問題もなく馬に乗ることができた。教えてくれた「夏木」親分や扱いのコツを教えてくれた殺陣師の「宇仁貫三」グループの方々には感謝している。

動物との共演は意のままにならないから本当に大変だ。だがこれもその動物の飼い主や扱い者(犬の演技指導者)の意識の持ちようと、一緒に出演する俳優の取り組みかたによって左右される訳で、決して動物がそのような行動をとる訳ではないのだ。愛すべき動物タレントには全く罪がないのである。とはいうものの好んで共演したいと思わないのは自分の演技に自信がない?からかもしれない。

